

アイスランド語語彙の語構成

—ゲルマン語の視点—

八 亀 五三男

I はじめに

ローマ帝国が北はブリタニアから、ダキア、地中海、南は北アフリカまで、ヨーロッパ全土にその勢力を拡大している時、ゲルマン民族は自分たちの部族を綿々と維持し続け、遂には民族移動を開始し、分裂後の西ローマ帝国を西暦476年に滅亡に至らしめている。

ヨーロッパ各地に散らばった西ゴート、東ゴート、ヴァンダル、ブルグンドなどの東ゲルマン諸部族は、部族的な特徴を早くに喪失し短命に終わるのであるが、西ゲルマンのフランクは部族的な伝統慣習を維持しつつ国家を形成していく。また、北ゲルマン人はこの時期には移動することではなく、8世紀になってノルマン人、いわゆるヴァイキングとして活動を開始することになる。

そして、ゲルマン人たちは現在のヨーロッパ北部でその一大勢力を誇っている。

北ヨーロッパのノルウェーに9世紀、独裁的なハラルド美髪王 (Harald Hårfagre 850? -933) が登場した。彼は豪農たちに隷従か国外追放かを迫ったが、誇り高き豪農たちは家族、家畜などを引き連れて船で海を西方に移動することを決意した。そして、アイスランドに到着しそこで生活を始めるのである。その時、ノルウェーの神話、英雄物語を携え、後にそれがヨーロッパ最大の中世文学『サガ』、『エッダ』として結実する。

言語的にはアイスランド島のアイスランド語はもともとスカンディナヴィア半島のノルウェー語であるので、北ゲルマン語の下位分類は、西ノルド語 (ノルウェー語、アイスランド語) と東ノルド語 (デンマーク語、スウェーデン語) になる。

このように、ノルウェー人によって植民されたアイスランドが、印欧語、ゲルマン語の最北西端に位置することになった。印欧祖語、ゲルマン祖語が話されていた時代については、D. Ringeの説明が明瞭である：

PIE (= Proto-Indo-European) was probably spoken some 6,000 years ago, ... Proto-Germanic ... is unlikely to have been spoken before about 2,500 years ago (c. 500 BC).¹⁾

つまり、印欧祖語が話されていたのが6000年前 (紀元前4000年) 頃、ゲルマン祖語は2500年前 (紀元前500年) 頃以降と言うことである。

北欧の北ゲルマン語の中で唯一名詞に格変化を残しているアイスランド語は、地理的な状況もあるのだろうが、語彙の面でかなり保守的な性格を有している。つまり、他のゲルマン語と比較して、本来のゲルマン語の血統を持つ語彙を忠実に残しており、言語純粋主義がかなり浸透している。これは、『サガ』、『エッダ』など、中世ヨーロッパ随一の量を誇るアイスランド文学の伝

統を誇りに思う国民性の故であろうか。

【以下に提示する具体的な語彙は本来は1語として綴られるが、語構成を明確にするために2つの構成要素の間にハイフンを挿入する】

まず、次の例を見て頂きたい。左から、アイスランド語、デンマーク語、ドイツ語 [英語] の順になっている。

árs-tími: árs-tid: Jahres-zeit [season]

アイスランド語 árs-tími の語構成は year-time であるが、デンマーク語、ドイツ語でも同じことが言える。ただ、名詞に格変化（主格、属格、与格、対格）が存在するアイスランド語、ドイツ語では単数属格の標識である -s, -es が第一要素に添加され、厳密には year's time となっている。デンマーク語に名詞の格変化はないが、ゲルマン語の単数属格の名残の -s が付けられている。

すなわち、英語を除いて、ゲルマン語としてアイスランド語、デンマーク語、ドイツ語は全て year ('s) + time の語構成として共通しており、これら3言語の統一性を見て取ることができる。

本稿では、ヨーロッパ大陸から遠く離れたアイスランド島の言語は、その語彙の語構成がいかなる状況になっているか、複合語の語構成にどのような特徴があるのかを、他のゲルマン語と比較しながら、考察したいと思う。

II アイスランド語とデンマーク語

北ゲルマン語に属するアイスランド語（西ノルド語）とデンマーク語（東ノルド語）には、語彙にどのような形式的意味的類似が存在するか、それをまず確認したいと思う。アイスランド語、デンマーク語の順で、意味は最後に英語で示してある。

1. akur-yrkja: ager-dyrkning [agriculture]
2. barna-herbergi: barne-kammer [nursery]
3. dag-blað: dag-blad [newspaper]
4. föður-morðingi: fader-moder [patricide]
5. höfuð-staður: hoved-stad [capital]
6. kvöld-matur: aftens-mad [supper]
7. lands-svæði: land-område [territory]
8. mat-seðill: spise-kort [menu]
9. samtengingar-merki: binde-streg [hyphen]
10. vinnu-stofa: arbejds-værelse [study]

アイスランド語、デンマーク語ともに二つの構成要素から成り立っており、アイスランド語の意味は順に

1. field-cultivation
2. children-room
3. day-leaf
4. father-murderer
5. head-place

6. evening-food 7. land-area 8. food-note 9. compound-sign 10. work-room

で、デンマーク語もほぼこれと同じと言ってよい。重要なことは、両言語とも平易な日常語彙を用いて一つ概念を表す語を造り上げていることである。また、Iで述べたようにアイスランド語は名詞に格変化があるので、2, 4, 7, 9, 10の第一構成要素は属格(2のみは複数)の形で第2構成要素とつながっている²⁾。

III 北ゲルマン語と西ゲルマン語

次に、北ゲルマン語と西ゲルマン語(本稿では、ドイツ語を取り上げる)にはどのような対応が見られるのであろうか、いかにゲルマン語の語構成に統一性があるのかを観察したいと思う。IIにおける実例にドイツ語を加え、それを比較対照したものを以下に示してある。

アイスランド語：デンマーク語：ドイツ語 [英語] の順になっている³⁾。

akur-yrkja: ager-dyrkning: Acker-bau [agriculture]

barna-herbergi: barne-kammer: Kinder-zimmer [nursery]

dag-blað: dag-blad: Tage-blatt [newspaper]

föður-morðingi: fader-moder: Vater-mord [patricide]

höfuð-staður: hoved-stad: Haupt-stadt [capital]

kvöld-matur: aftens-mad: Abend-essen [supper]

lands-svæði: land-område: Land-gebiet [territory]

mat-seðill: spise-kort: Speise-karte [menu]

samtengingar-merki: binde-streg: Binde-strich [hyphen]

vinnu-stofa: arbejds-værelse: Arbeits-zimmer [study]

IIでそれぞれの意味は記述しているのですべての語について説明することはしないが、例えば、vinnu-stofa: arbejds-værelse: Arbeits-zimmer [study]

の場合、3語(stofa, værelse, Zimmer)とも形は異なっているが意味は全てroomであり、また3言語が全て共通して二つの構成要素から成り立っていることに注目すべきである。

以下においては、アイスランド語、デンマーク語、ドイツ語の共通点、相違点をいくつかのパターンに分けて、その並行関係を示したいと思う。

1. 3言語で、第1構成要素、第2構成要素が同じ意味

この種類の例が非常に多く観察されるが⁴⁾、以下の3パターンについて考えてみたい。

(1) 3言語とも同一語

sjálfs-morð: selv-mord: Selbst-mord [suicide]

kaup-maður: køb-mand: Kauf-mann [merchant]

orða-bók: ord-bog: Wörter-buch [dictionary]

英語は日常語彙レベルでこれ以上の構成要素に分けることはできないが、他の3言語はself-

murder, purchase-man, word-bookのように、平易な語に分けることができる。

(2) アイスランド語のみ異なる語

sjó-ferð: sø-rejse: See-reise [voyage]

dýra-ríki: dyre-verden: Tier-welt [fauna]

mat-seðill: spise-kort: Speise-karte [menu]

1, 2番目の例は第1要素は同じであるが、第2要素はアイスランド語だけ異なる。3番目の例は両方とも異なっている。つまり、デンマーク語とドイツ語に近いと言えるのではなからうか。以下の例も同様のことが言える（動作主標識-er）:

vinnu-veitandi: arbejds-giver: Arbeit-geber [employer]

vinnu-þiggjandi: arbejds-tager: Arbeit-nehmer [employee]

デンマーク語とドイツ語は [work-giver, work-taker] と -erによって動作主を示している。vinnuはvinna [work] の単数属格, veitandi, þiggjandiはそれぞれveita [to give], þiggja [to receive] の現在分詞で「～する者」を意味しており, give, receiveの目的語に当たる語 (vinna) が明確に構成要素として顕在化している⁵⁾。英語が借用したもとのフランス語は、それぞれ employeur, employéとなっている。

(3) 「肉」を意味する語彙の比較対照

英語における「動物」と「肉」を意味する語彙の相違はフランス語の影響として有名であるが、その影響を受けていないアイスランド語、デンマーク語、ドイツ語の場合は、完全に同一の語構成になっている。

kálfs- kjöt: kalve-kød: Kalb-fleisch [veal]

nauta-kjöt: okse-kød: Ochsen-fleisch [beef]

kinda-kjöt: fåre-kød: Hammel-fleisch [mutton]

svína-kjöt: svine-kød: Schweine-fleisch [pork]

よく知られている通り、1066年のノルマン征服以後フランス語が大量に英語に流入したが、政治、宗教、軍事、衣服、料理、芸術などの分野で際立って多かった。フランス語では動物も肉・料理名も同じ語で表すのだが⁶⁾、英語では動物・家畜名は本来の英語で、肉・料理名はフランス語からの借用語で表す (calf – veal, ox – beef, sheep – mutton, swine – pork)。しかし、他の3言語では「家畜名+肉 (kjöt, kød, Fleisch)」で料理名を示している。

第2要素は、ドイツ語だけが異なる単語 (Fleisch) を使用しているが、意味は「肉」で他の2言語と全く同じである。第1要素に関しては、「羊肉」が3言語とも異なる、「子牛肉」と「豚肉」は3言語とも同じ、「牛肉」はアイスランド語のみ異なる。すなわち、アイスランド語だけ、同じゲルマン語の中でも少し特異性を持っていると言える。

2. アイスランド語のみ意味・構成要素数が異なる語

(1) デンマーク語とドイツ語が同一の意味構成⁷⁾

fundar-stjóri: ord-styrer: Vor-sitzende [chairman]

の場合は、それぞれ meeting-chief, word-controller, before-sitting と、全く意味構成が異なっている。

しかし、以下の例を見て頂きたい：

ævi-saga: levned-beskrivelse: Lebens-beschreibung [biography]

アイスランド語 life-story に対して、他の2言語は life-description の語構成になっている。また、

sjón-varp: fjern-syn: Fern-sehen [television]

では、sight-throwing に対して、far-seeing [sight] になっている。

すなわち、デンマーク語とドイツ語の第1・第2構成要素は同じ意味内容で共通しているのに対して、アイスランド語だけが異なった意味結合になっている。

(2) アイスランド語が1つの語で対応

lyktir: fuld-endelse: Fertig-stellung [completion]

skagi: halv-ø: Halb-insel [peninsula]

þýða: over-sætte: über-setzen [translate]

デンマーク語、ドイツ語が2語で構成されているのに対して、アイスランド語は1語である。例えば、2番目のデンマーク語、ドイツ語は half-island の語構成になっている。

因に、この逆の例が

gera gegndrepa: gennem-bløde: durch-hnässen [soak]

で、デンマーク語、ドイツ語は through-drench と1語、アイスランド語は make soaked と動詞をそのまま独立させて2語にしている。

(3) アイスランド語が3要素

ljós-mynda-vél: fotografi-apparat: Foto-apparat [camera]

アイスランド語のみ3語で出来上がっており、他の2言語の photography-apparatus に対して、light-form-machine とかなり複雑な語構成になっている。ljós-mynd は photography の意味である。

akur-yrkju-maður: jord-bruger: Acker-bauer [farmer]

は、field-cultivation-man と3要素からなるアイスランド語の語構成に対して、他の2言語の第2要素は bruge [to use], bauen [to cultivate] に動作主の標識 -er を付加して派生語を造り出している。

ここでひとつ問題点が浮かび上がってくる。接尾辞の -er を使用せずに、名詞の maður で動作主を表すのはアイスランド語では普通なのであろうか、もう少し調査する必要がある。次の例も同じようには考えられないだろうか：

eftir-maður: efter-følger: Nach-folger [successor]

デンマーク語、ドイツ語では after-follower となっているのであるが、すなわち 動詞 + -er で動作主を表しているが、アイスランド語には動詞は存在せず、after-man である。

以下の例では、

innbrots-þjófur: indbruds-tyv: Einbrech-er [burglar]

ドイツ語のみがeinbrechen [to break in] という動詞に -er を添加しているのに対して、他の2言語ではthiefを意味する名詞を第2要素に用いている。同じ北ゲルマン語としての共通性と言える。

このようにゲルマン語に属する3言語の語構成の特徴をいくつか指摘してきたが、中でもアイスランド語が特徴的であることが理解できると思う。

アイスランド語、デンマーク語、ドイツ語について大きく以下の5つの相互関係を設定することが可能である。

1. 3言語とも同一
2. 3言語とも異なる
3. アイスランド語のみ異なる
4. デンマーク語のみ異なる
5. ドイツ語のみ異なる

それぞれの具体例は、次のようになる：

1. kaup-maður: køb-mand: Kauf-mann [merchant]
2. fundar-stjóri: ord-styrer: Vor-sitzende [chairman]
3. sjón-varp: fjern-syn: Fern-sehen [television]
5. svína-kjöt: svine-kød: Schweine-fleisch [pork]

今回調べた限りでは、4の例は見つからなかった。意味も形式も考慮した場合、最も離れているのは、アイスランド語とドイツ語とは言えないだろうか。

それは次の語の対応を観察した時にさらに理解しやすくなる。ドイツ語には、アイスランド語、デンマーク語に見られるゲルマン語本来の形が見られない：

bróður-sonur: broder-søn, nevø: Neffe [nephew]

lýð-stjórn: folke-styre, demokrati: Demokratie [democracy]

では、アイスランド語、デンマーク語はbrother-son, people-controlの語構成に対して、ドイツ語にはそれが見受けられない。また、デンマーク語はnephew, democracyに当たる語が同時に見いだせる。

以上のことから、語構成、語彙と言う側面では、デンマーク語は、アイスランド語とドイツ語の中間に位置すると考えることはできないだろうか。言語系統的には北ゲルマン語に属する一方、地理的にはヨーロッパ大陸の北に突き出た半島で話されているデンマーク語にはこのような言語状況が生まれるのは当然と言えるかもしれない。逆に言うと、デンマーク語とドイツ語には類似点が存在する一方、離島であるアイスランドの言語はデンマーク語と同じ北ゲルマン語の中でも、少し特異性を持っていると言える。

最後にもう一点指摘しておきたい。

今まで提示した実例を見るとわかるのであるが、本来のゲルマン語語彙は具体的に対象物を明

示することにより、その単語の意味を明確にしようとしていると思われる。以下の例では、

bréfa-viðskipti: brev-veksling: Brief-wechsel [correspondence]

lestar-stjóri: tog-fører: Zug-führer [conductor]

letter (bréf) と train (lest) が3言語において語構成の第1要素として顕在化しており、これがゲルマン語共通の大きな特徴といえる。

IV 中世アイスランド語写本における複合語の書記法

今まで述べてきた複合語に、1語であるという認識がどの程度あるのか、あるいは独立した2語としてとらえているのか。これについて、中世アイスランドの言語で書かれた写本を観察することによりその本質に迫りたいと思う。

複合語というのは現在の視点からのものであって、古い写本においては実際どのように書かれていたか、そこから非常に興味深いことがわかる。

中世アイスランドで使用されていた古アイスランド語 Old Icelandic の初期資料に *Reykjaholtsmáldagi* (12世紀末から13世紀にかけて数人の異なる書記者が記述) があるが、これはいわゆる『サガ』文学が記述される以前に書かれたものであり、内容は Borgarfjörðr にある Reykjaholt 教会の財産目録が記載されている。máldagi とは “document of the rights, property and inventories of churches” のことである (-s は単数属格の標識)。

この資料は一葉で、表 (recto) に36行、裏 (verso) は右半分、左半分にそれぞれ4行ずつ古アイスランド語が書かれている。表に kirkiofe (= kirkjufé [church property]) という語が5回出て来る (r = recto)。

1. …… kirkio (r17)
fe …… (r18)
2. kirkio fe (r18)
3. kirkiofe (r20)
4. kirkio fe (r24)
5. kirkio fe (r28)⁸⁾

現在北歐文献学で使用されている古アイスランド語の正書法は kirkjufé なのだが、これが当時のこの写本では kirkiofe と書かれていた。kirkio [= kirkja] は kirkja [church] の単数属格の形であり、fe [= fé] は property の意味である。1は改行されているので判断はむずかしいが、重要なポイントはこの語が1語として書かれているか (3)、2語として書かれているか (2, 4, 5) である。名詞の一方が属格形であれば、2つの語として分けて書いても何ら文法的問題は発生しない。

Halldór Halldórsson によると、「植民時代」(9世紀後半) から造語と言う言語行為はあった⁹⁾。それゆえ、新しい複合語を造る時にまだ2語と意識している場合はスペースを入れ、1語ととらえた場合はスペースを入れずに書いたのではなかろうかと推測できる。写本上の上記の例はそれを示す重要な証拠だと考えられる¹⁰⁾。

V アイスランド語の言語純粋主義

アイスランドに英語の *tourist* という語が入り込もうとすると、アイスランド語はこれに対して、*ferða-maður* [travel-man] (*ferða* は *ferð* の複数属格) と言う新語を造り出す¹¹⁾。既にアイスランド語の語彙項目に存在する語を用いて複合語を作るのである。

ゲルマン語固有の語構成が最も保守的に堅持されているアイスランド語は、その言語純粋主義 *linguistic purism* でよく知られている言語である¹²⁾。

第二次世界大戦中1940年5月にアイスランドはイギリスに領有され、また1941年にはアメリカ軍が入って来た。それにより首都レイキャヴィークには地方から人々がどんどん集まり、社会活動が非常に活発化した。言語的にも、映画や音楽など大衆文化を通じて、特に若者の間に英語、すなわちアングロ=サクソン系(西ゲルマン語)の語彙が多く流入し始めた。この大戦以前はデンマークに支配されていたが、この両者の影響から脱皮して独立するためには、何百年も続く北ゲルマン語で唯一名詞に格変化を維持するアイスランド語の言語的伝統を残し、それを国の言語政策にすることが重要であった。Svavar Sigmundsson は、アイスランド人の文学的伝統への固執を大きな理由に挙げている¹³⁾：

The basis for the purification of Icelandic was the belief that the language should be as unchanged as possible from the classical language of 13th- and 14th-century literature so that people today could be able to read those works without major explanations.

新しい概念に対して新語を造る場合、大きく分けて三種類考えられる：

- (1) 借用翻訳 (loan translation)
- (2) 既存のアイスランド語をそのまま利用
- (3) 既存のアイスランド語を組み合わせて新しい複合語を造語

特に (2) (3) に注意をする必要がある。アイスランド語に

sími [telephone], *þota* [jet plane], *tölva* [computer], *gervihnöttur* [satellite], *fjárfesting* [investment], *frumeind* [atom]

という語彙があるが、これらの単語の本来の意味は

sími [thread]

þota [to rush]

tölva (< *tala*) [number]

gervihnöttur < *gervi* [imitation] + *hnöttur* [globe],

fjárfesting < *fjár* (< *fé*) [money] + *festing* [fastening]

frumeind < *frum* [basic] + *eind* [unit]

であり、最初の3つは (2)、後の3つは (3) に属する。これがアイスランド語語彙の大きな特徴になっている。

新しいテクノロジー関係の語彙は世界中に広まっており、上記の (1)~(3) のやり方では間

に合わないのは世界中どの言語でも同じ状況であるのだが、ヨーロッパ大陸から遠く離れ人口も30万人強の小国のアイスランド人にとっては、そのアイデンティティーを保つためには、中世サガ文学の伝統、言語が大きな心の拠りどころになっているのではなかろうか。

VI 結語

いままで観察してきたように、アイスランド語、デンマーク語、ドイツ語のゲルマン語には共通して、本来のゲルマン語語彙と語構成が残されている。特にアイスランド語は、その地理的状況、国の規模、文学的伝統のゆえに、古い形態が多分に維持されている。

アイスランド語語彙の特徴としては、

- (1) 平易な日常語彙の使用
- (2) 言語純粹主義

を挙げることができるであろう。ゲルマン語本来の、平易な日常語彙を用いて複合語を造語する特徴に加えて、さらに言語純粹主義により借用語を極力避けると言う傾向が現代アイスランド語の純粹性の特徴になっていると思われる。

世界中の国が経験をしているように、今後も英語からの影響がどんどん入り続けるであろうが、アイスランド語は保守的な言語であって¹⁴⁾ もう一方では頑なに *purism* を守ろうとする力が働き続けるように思えてならない。

最後に、日本語との比較において、アイスランド語の語構成の特徴をもう一度指摘しておきたいと思う。

初めて英語の *supper* に接したアイスランド人はその意味は全くわからない。しかし、*kvöldmatur* と聴くとすぐわかる。それは、平易な日常語彙で出来上がっているからである (*kvöld-matur*)。日本語の「夕食」もアイスランド語と全く同じ語構成である。*svínakjöt* [*pork*] = 「豚肉」についても同様のことが言える (*svína-kjöt*)。

astrology, *pachyderm*, *piscivorous* という語に初めて接した時、日本語を母語とする人は何のことも全く理解できないし、*senseijutu*, *kouhijuu*, *gyoshokusei* と聴いても何のことかわからない。しかし「占星術」「厚皮獣」「魚食性」と書けば、直ちに理解できる¹⁵⁾。

これと同じ関係が、*supper* と *kvöld-matur* の間に存在している。

注

1) Don Ringe. *From PIE to PGmc*, p. 67

2) Höskuldur Práinsson は、3種類の複合語の造語法を以下のように説明している：

It is customary to speak of three types of compounding: *stem compounding* ... where the first part of the compound is a stem; *genitive compounding* ... where the first part of a compound is in the genitive case; and *connective compounding* where a special connective sound (usually a vowel) that cannot be interpreted as a case ending

connects the two parts. The difference can be seen in the following examples: (a) *snjóhús* ‘snow house’ ... (b) *barðaskóli* ‘children’s school’ ... (c) ... *leikfimiðhús* ‘gymnasium’. (“Icelandic” p. 165)

人名に関しては、(b) の genitive compounding が使用される。例えば、Kristján Árnason の場合、この男性の名前は Kristján だけで、Árnason は名字ではなく単に ‘son of Árni’ という意味である。父親の名前が Árni で、Árna- は Árni の単数属格形である。仮に女性の場合は、Árnadóttir ‘daughter of Árni’ となる (dóttir=daughter)。

- 3) ただし、以下のような基準に基づき、具体例を例示する。

sjúkdóms-einkenni: sygdoms-tegn: Krankheits-zeichen [symptom]

英語以外は、disease-sign の複合語になっているのだが、デンマーク語、ドイツ語では英語形に対応する symptom, Symptom も存在する。しかし、本稿においては英語以外の3言語の共通性を明確にするために、複合語の形式を取り上げる。

- 4) 本文以外にも、以下のような実例がある：

afl-mikill: kraft-fuld: kraft-voll [vigorous]

brott-nám: bort-førelse: Ent-führung [abduction]

draum-sjón: drømme-syn: Traum-gesicht [vision]

peninga-skápur: penge-skab: Geld-schrank [safe]

sjúkdóms-einkenni: sygdoms-tegn: Krankheits-zeichen [symptom]

skrauts-steinn: smykke-sten: Edel-stein [jewel]

upphafs-stafur: begyndelses-bogstav: Anfangs-buchstabe [initial]

þjóð-flutningur: folke-vandring: Völker-wanderung [migration]

アイスランド語の意味は順に、strength-big, away-seizure, dream-sight, money-closet disease-sign, decoration-stone, beginning-letter, people-transportation である。

- 5) 同様の並行関係にある例として以下の語がある：

lán-veitandi: lán-giver: Darlehns-geber [lender]

lán-þegi: lán-tager: Darlehns-nehmer [borrower]

lán-þegi の þegi は、複合語を造る時のみに使用される構成要素で、þiggjandi の変化形と考えられる。

- 6) 例えば、フランス語 *bœuf* は「牛」と「牛肉」の両方を意味する。

- 7) これと同じ例を次に挙げておく：

hjúkrunar-kona: syge-plejerske: Kranken-pflegerin [nurse]

sér-fræðingur: fag-mand: Fach-mann [specialist]

アイスランド語の care-woman, self-specialist に対して、デンマーク語、ドイツ語は patient-nurse, subject-man の語構成である。

- 8) 1~5 の文法形式は、それぞれ 1. 単数主格, 2. 単数対格, 3. 単数対格, 4. 複数対格, 5. 単数主格 である。

- 9) “The formation of new words has without doubt been practiced in Icelandic from the time of the Settlement.” (“Icelandic Purism” p. 77)

- 10) 古い写本で **kr** (= *konungr* [king]) (単数主格) と書かれているのは、正に「王が」であって漢字と同じ現象だと言える。仮に表音文字のレベルで考えると、**kr** は [kr] という発音になるが、これは [konungr] と発音されていたことは間違いない。すなわち、**k** は表意文字の性質を有していたと考えることができる。**k** は語幹で意味を示し、-r は単数主格の屈折語尾である。**k** に横棒を加えることにより、表音文字を表意文字に変えたことになる。**k**-で始まる単語が多々ある中で、王を題材にした内容であれば当然 **king** に当たる語が頻出することは明らかで、最多頻出する語に対して、筆写する労力の軽減を考えて、**konungr** を **k** 一文字で表すのは当然のことである。

アイスランド語の初期の写本には, *maþr* (= *maðr* [man]) という単語が, 省略されて *𐌚* と書かれることがよくある。これはルーン文字で [m] の音価を持っている。男性名詞単数主格を意味するのだが, この語が複数属格になると *𐌚𐌚* と書かれる (二つのルーン文字の真上に小さく, n と a が書かれている)。manna が普通の綴りであるが, 複数なので同じ文字を二つ書き, 最後の -na を分けて真上に書いている (D. A. Seip. *Palæografi*, p. 59)。これももはや単なる表音文字ではなく, 表意文字といえることができる。

写本をじっくり観察することにより, その言語の様々な本質的側面を観察することができる。

- 11) Kristján Árnason “The Nordic Languages ...” p. 1569
- 12) Svavar Sigmundsson “Trends in linguistic development ...” p. 1832 & 1837.
- 13) Svavar Sigmundsson “Trends in linguistic development ...” p. 1836
- 14) Kristján Árnason “The Nordic Languages ...” p. 1560
 “It (= Modern Icelandic) is the most conservative of the Nordic languages, and it is sometimes said that it has changed little from the time of settlement.”
- 15) 日本語ではよくわからないが, 英語を見ると意味内容がわかる例として「国会議員」がある。「国会議員」と聴いても, その本来の仕事がよくわからない。しかしながら, 立法府の人間であるので, 英語で lawmaker と言えば本来の仕事が明確に理解できる。

参考文献：

- Halldór Halldórsson “Icelandic Purism and Its History” *Word* 30 (1979)
- Hreinn Benediktsson. *Early Icelandic Script* (Reykjavík: The Manuscript Institute of Iceland, 1965)
- Höskuldur Þráinsson “Icelandic” Ekkehard König & Johan van der Auwera (eds.) *The Germanic Languages* (London/ New York: Routledge, 1994)
- Kristján Árnason “The Nordic languages in the 20th century” Oskar Bandle (ed.) *The Nordic Languages Vol. 2.* (Berlin/ New York: Walter de Gruyter, 2005)
- Reykjaholtsmáldagi*. Udgivet af STUAGNL [Samfund til Udgivelse af gammel nordisk Litteratur] (København: S. L. Møllers Bogtrykkeri, 1885)
- Ringe, Don. *From Proto-Indo-European to Proto-Germanic* (Oxford: Oxford University Press, 2006)
- Seip, Didrik Arup. *Palæografi B: Norge og Island* [*Nordisk Kultur XXVIII: B*] (København: J. H. Schultz Forlag, 1954)
- Svavar Sigmundsson “Trends in the linguistic development since 1945. IV: Icelandic” Oskar Bandle (ed.) *The Nordic Languages Vol. 2.* (Berlin/New York: Walter de Gruyter, 2005)
- Sverrir Hólmarsson et al. *Íslensk-ensk orðabók* (Reykjavík: Íðunn, 1989)